

〈1〉釜川の風景を育む

KAMAGAWA POCKET

釜川から育む会

ビルトザリガニ

中村 周

1 はじめに

(1) 風景を育む

筆者らは、平成25年に釜川沿いの空きバラックを、住居・アトリエ・イベントスペースの機能を持つKAMAGAWA POCKET（以下「KP」という）へセルフリノベーションした。これを皮切りに、空き家活用プロジェクトや、釜川沿いのセレクトショップと連携したファッションショー等、建物の設計・改修やコンテンツの創出を通して、地域に根ざした活動を続けてきた。釜川には、暮らす、働く、遊びに来るといったさまざまな関わり方を持つ人々がいるが、一過性のイベントで利根的にまちを盛り上げるのではなく、1つ1つのプロジェクトを丁寧に積み上げていくことで、そういった人々がより愛着を持つとともに、まだ訪れたことがない人が1度は来てみたいと思えるような風景を少しずつ育んでいきたいと考えている。

(2) 釜川の概要

釜川は、湧き水による2つの沼を源流とし、中心市街地で田川に合流する全長約7.3kmの一級河川である。宇都宮の中心市街地は、東西に約1.5km離れたJR宇都宮駅と東武宇都宮駅を内包する範囲で指定されており、その中心部を斜めに横断するように釜川が流れている（図1）。まちの中心部では、いわゆる赤線地帯として栄え、また、度重なる氾濫により暴れ川として知られていた。日本で初めての二層式河川工事が行われ、かつての赤線地帯が整理されるとともに、水と緑が感じられる水辺空間が整備された（写真1）。



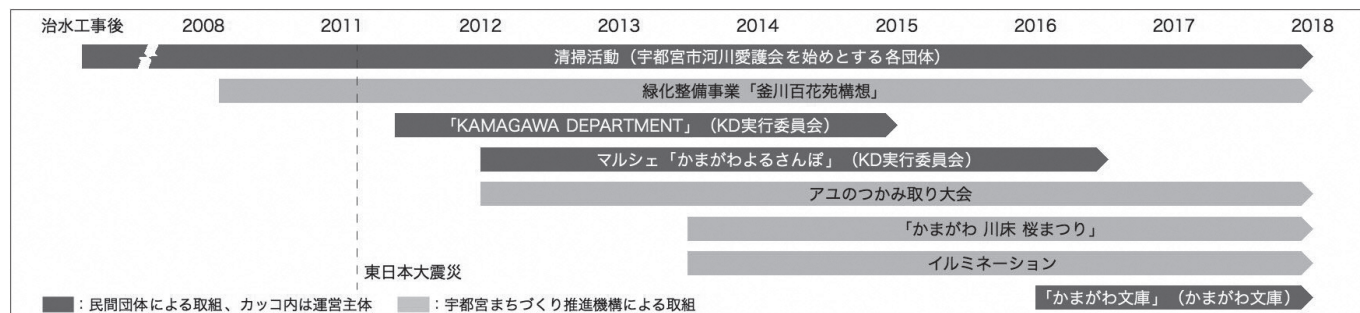
図1 宇都宮市中心市街地における釜川

筆者作成



写真1 二層式河川工事により親水空間が整備された釜川
釜川から育む会撮影

現在は、空き家を改修した飲食店や、セレクトショップ、雑貨屋が点在するとともに、アーティストや、デザイナー、作家といったクリエイティブな人々が集まり、宇都宮市の中でも洗練されたエリアとして認知され、静かながらも品のある賑わいをみせている。また、平成23年の東日本大震災を機に、継続的に行われていた清掃活動に加え、周辺の店主やデザイナー等の有志によるナイトマーケットや、宇都宮まちづくり推進機構による「かまがわ 川床桜まつり」、任意団体が運営する24時間365日開放している図書館の「かまがわ文庫」といった多様な主体によるさまざまな取組が行われるようになり、宇都宮市における文化の拠点になっている（図2）。このような状況の中、市は釜川周辺地区を、市を代表する誇れる景観づくりが必要な区域として景観形成重点地区に指定することをめざしており、これからの釜川の在り方を考える契機となっている。



(図注) 「KD実行委員会」は、KAMAGAWA DEPARTMENT実行委員会を示す

図2 釜川における近年の取組

筆者作成

2 まちの余白を遊び場に

(1) 遊びによって育まれる風景

地方都市中心部において空き家や空地の増加が問題になって久しく、中核市である宇都宮市も例外ではない。「余白から遊び場へ」(中村 2019)では、このような空き家や空地といった「まちの余白」で行われる「遊び」が結果として豊かなまちの風景を生み出すことを示している。内容や参加者を限定しない個人の意欲に基づく活動である「遊び」は、楽しそうか否かで参加が判断され、それぞれがやりたいことや出来ることを基に自発的に行動するため、活動自体が喜びや満足をもたらす。こういった「遊び」を促すために、筆者はこれまで、「まちの余白」を誰もが使えて何かをしたくなるような「遊び場」として設計および運営してきた。

(2) まちの余白における遊び

筆者は、宇都宮大学在学中の平成 25 年に、釜川沿いの築 60 年以上の空きバラックを、仲間や地域住民と一緒に KP に改修した。川側から手前の 1/3 のスペースは半屋外のテラス、その奥の 1/3 は大きな開口を持つアトリエ兼ダイニング、一番奥の 1/3 はプライバシーが確保できる寝室や浴室といった順番で配置し、「まちの余白」をレイヤー状に構成する計画とした。これまで、この KP を拠点とし、さまざまな活動を行ってきた(表1)。

表 1 KAMAGAWA POCKETにおける活動

年	月	名称	立場	内容
2013	7-12	KAMAGAWA POCKET	主催	空き家リノベーション
	8	KAMAGAWA DEPARTMENT	協力	家具デザイン、会場設営
2014	1	おじさんの顔が空に浮かぶ日	協力	都市模型制作、展示会場設営
	6	FASHION STREET PROJECTION	主催	ファッションショー
	7-12	コガメコーヒー	協力	空き家リノベーション
	8	観客のいない音楽会	主催	参加者が演奏者になる音楽会
	9	KAMAGAWA DEPARTMENT	協力	家具デザイン、会場設営
	11	けーびーてらすいち	主催	フリーマーケット
	12	おじさんの顔が空に浮かぶ日	協力	広報等
2015	8	KAMAGAWA DEPARTMENT	協力	屋台デザイン、会場設営
	8-	KAMAGAWA GALLERY	主催	ギャラリー運営
	9	AISOME	主催	ファッションショー
2016	4	ツキイチトショカン	協力	展示
	7-9	select shop codama	協力	空き家リノベーション
2017	3-	釜川から育む、まちのビジョン	主催	シンポジウム、WS等
	4	ツキイチトショカン	協力	展示
2018	4	ツキイチトショカン	協力	展示

筆者作成

オリオン・フォト・タープでは、通りがかった人々にインスタントカメラでまちの魅力を撮影してもらい、オリオン通りと釜川が交わる一つ橋の上に、写真を用いた屋根をかけた(写真2)。また、釜川沿いにあるセレクトショップから服をリースし、モデルを一般市民から SNS で募集し、釜川沿いの複数箇所にスクリーンを立てて、事前に撮影した映像を流すファッションショーを企画・運営したり(写真3)、放置竹林の竹を使ってナイトマーケットで使うテントをデザイン・制作した。これらは、橋の上や、道路、駐車場、河川といった「まちの余白」に、誰もが簡単に組み立てられる仮設工作物を設置することによって成立している。また、プロジェクトごとに主体となるプレイヤーを SNS や口コミで募集し、実行委員会形式で企画することで、誰もが参加しやすい開かれた組織とした。

KPのテラスは、当初筆者が運営していたが、活動が可視化されるようになり、川向かいにある服屋の店主と釜川に関わっていた行政職員から相談を受け、24時間365日開放の小さな図書館「かまがわ文庫」の取組に展開した。誰もが自由に本を貸し借りできるこの図書館は、本を通してつながった地域住民や、周辺の店主、アーティスト等によって運営され、展示・インスタレーションが定期的にテラスで行われている(写真4)。



写真2 写真で作られたオリオン・フォト・タープ
筆者撮影



写真3 映像によるファッションショー
筆者撮影



写真4 テラスで行われるツキイチトショカン
馬込俊之撮影

以上のような諸プロジェクトや、かまがわ文庫の取組では、KPのアトリエを使って、お茶や食事をしながら頻繁に話し合いや制作活動が行われてい

る。今では、年齢、性別、職業等を問わず人の集まる素地ができつつあり、長年使われなかった「まちの余白」が、さまざまな協働による「遊び」を生み出す発信地になっている。

3 釜川から育む、まちのビジョン

(1) 景観形成重点地区指定の動き

釜川の立地の重要性や、近年のさまざまな活動を背景に、宇都宮市は、釜川周辺地区を景観形成重点地区に指定することをめざしている(宇都宮市2015)。景観法を根拠とした景観条例は、本来なら「地域の固有の特性と密接に関連するものであることにかんがみ、地域住民の意向をふまえ、それぞれの地域の個性及び特色の伸長に資するよう多様な形成が図らなければならない」¹が、宇都宮市ですでに指定されているものは、地域住民が主体となったものがほとんどなく、十分にその意向が反映されているとは言い難い。また、条例の内容は、建物壁面の色彩や、看板の大きさの制限等、街並みの表層を定量的に規制するものが主で、地域の個性や特色の伸長に資するために有効であるとはいえない。特に、中心部を流れ、人々の憩いの場になっている釜川においては、そこを訪れる人や、周辺の建物、川等との関係性を多様な側面から考察・構築していく必要がある。

そこで筆者らは、地域住民や地権者等と協働し、シンポジウムや、ワークショップ、定期的な勉強会等を通じて釜川の過去と現在を捉え、自然環境や、街並み、文化、日常の営みといった視点から未来を想い描き、釜川周辺地区の羅針盤となるようなビジョンブックを作成するため、平成29年4月に「釜川から育む会」(以下「育む会」という)を立ち上げた。育む会では、「釜川から育む、まちのビジョン」と題してプランナーの中島弘貴氏らとともに継続的

¹ 景観法第2条第3項による。

な取組を行っている。

(2) 取組体制

育む会は、釜川に愛着を持つ地域住民や、地権者、有識者、地元大学生で構成されている(図3)。事務局機能は大学生が多くを占めるKP関係者で担っている。これは、平成28年から継続的に開催している、釜川の今後を考えるためのKPにおける勉強会が、母体となっているためである。また、行政や、第三セクター、民間団体、研究機関と連携し、それぞれの得意分野を生かす相互扶助の関係を構築しつつある。釜川で活動している多くの主体間には、これまで連携があまりみられなかったが、育む会がそれらをつなぐ役割を担いつつある。

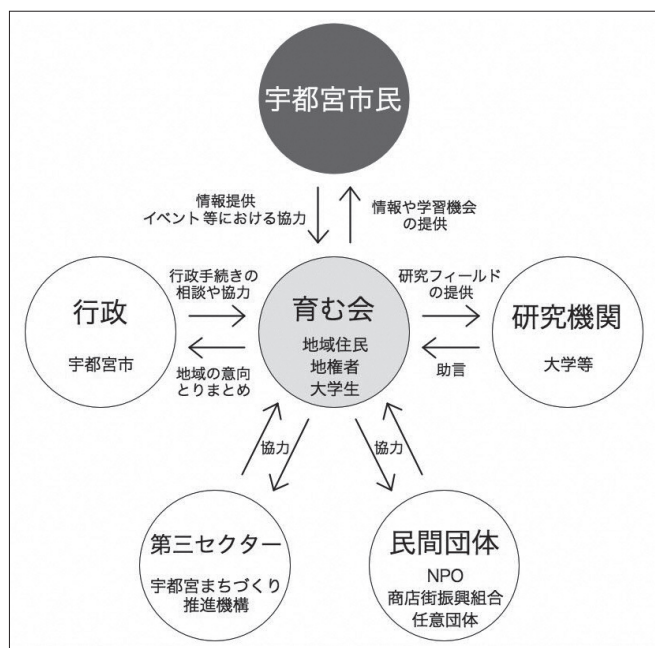


図3 釜川から育む会の取組体制

筆者作成

(3) シンポジウム・講演

「釜川から育む、まちのビジョン」では、釜川の魅力や、現状の課題、今後の方針を議論するために、シンポジウムや講演会を開催している。

第1回のシンポジウム²では、さまざまなエリアでまちづくり構想やビジョンブックの策定に携わって

きた東京大学の村山顕人准教授を招き、名古屋市錦二丁目のまちづくり構想(錦二丁目まちづくり連絡協議会2011)や、名古屋市港区のビジョンブック(港まちづくり協議会2013)等についてのレクチャーを受け、ビジョンブックの完成像を共有した(写真5)。



写真5 第1回シンポジウムの様子

釜川から育む会撮影

また、かまがわ文庫の館長や、宇都宮市職員、宇都宮大学の特任教授らを交えたパネルディスカッションを行い、意見交換した。そこでは、「釜川周辺には、川沿いにみんなが活動する空間が広がっていて魅力的」や、「新しくお店を出したくても空き店舗がなくて始められない」、「年々駐車場が増えている」といった意見が挙げられた。

環境デザイナーの廣瀬俊介氏による講演では、景観法の目的にある「地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動等との調和」³による良好な景観をつくるため、まずは、釜川に関わる人たちが釜川流域と周辺の風土・風景の由来を探ったり知ることが重要であると提言があった。そこで、廣瀬氏による風景観察会では、釜川周辺地区を歩きながら、魅力や課題をグループ毎に議論したり、参加者が持ち寄った昔の写真を囲み、過去の釜川周辺地区について思いを馳せた。

(4) 河川環境調査

現在の釜川は、ドブ川と呼ばれていた治水工事以前の状態より綺麗になったと言われている

² 平成29年3月11日に開催した。

³ 景観法第2条第2項による。

が、都市河川特有の臭いや、ゴミの放棄が多くみられる。これまで、清掃活動が高い頻度で行われてきたが、水質改善のための調査や生物多様性の確保といった河川環境を根本的に改善する取組はあまり行われてこなかった。そこで育む会では、豊かな河川環境を育むことを目的として、都市河川における調査やワークショップを専門とする講師に依頼するとともに、一般参加者を募り、源流から下流までの水質と生物の基礎調査を行った⁴（写真6、7）。



写真6 中心部で水質調査する子供達
釜川から育む会撮影



写真7 源流で生物採取する様子
釜川から育む会撮影

COD（化学的酸素要求量）の測定による水質調査の結果（表2）、源流（St. 4）や上流（St. 2）では、1～2 ppmと低い値を示し、水質が良好であることがわかった。また、中心部の下流（St. 1）では4 ppmで、アユやヤマメが生息する溪谷と同様の水質を示した。これは休日の昼間に採取したこと、晴天が続く、汚水などの流入が起こらなかったためと考えられる。

⁴ 平成29年5月13日、7月15日、11月14日に実施した。

網や、罟、釣りによる生物調査の結果（表3）、釜川全域において栃木県版レッドリストで要注目とされているアブラハヤが確認され、貴重な湧水環境が残されていることがわかった。また、環境省指定の絶滅危惧種ⅠB類かつ栃木県版レッドリストにて絶滅危惧種Ⅱ類とされているスナヤツメ類と、同絶滅危惧種Ⅱ類であるメダカが確認された。特にスナヤツメ類は度々幼魚が採集されたことから、釜川で繁殖が行われていることが推測できる。

表2 水質調査結果

調査日	場所	調査項目						備考
		水温 (℃)	COD (ppm)	PO ₄ -P (ppm)	NH ₄ -N (ppm)	NO ₂ -N (ppm)	NO ₃ -N (ppm)	
5/13	St.3	16	6	—	—	—	—	雨天時のため参考データ
	St.4	14	8以上	—	—	—	—	強雨による濁水のため無効
7/15	St.1	21	4	0.02	0.5	0.02	2	
11/14	St.2	10	2	—	—	—	—	
	St.4	12	1	—	—	—	—	

筆者作成

表3 生物調査結果

科名	標準和名	調査日・場所					環境省 カテゴリ	栃木県 RD
		5/13		7/15	11/4			
		西弁天沼	東弁天沼	下流	上流	西弁天沼		
ツメナギ科	スナヤツメ類						絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類
コイ科	コイ	○		○		○		
	ヨイ(飼育品種)	○		○				
	ギンブナ	○		○				
	オイカワ	○		○				
	カワムツ	○		○	○			
	アブラハヤ	○	○	○		○		要注目
	ウグイ		○	○	○			
	タモロコ	○		○	○			
ドジョウ科	ドジョウ				○		情報不足	
ナマズ科	ナマズ							
メダカ科	メダカ	○					絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類
ハゼ科	トリシ/ボリ				○	○		
出現種数		9	2	9	7	3		

釜川から育む会作成

以上のデータは、試験的に実施したものであり、全地点において通年データが収集できていない状況である。今後は、定点での継続的な水質・生物調査を実施することで、環境の状況を把握する重要なデータとなることが期待される。

(5) 景観形成重点地区への指定に向けて

これまでのシンポジウムや、調査、勉強会等をふまえて、地域ブランディングや、グラフィックデザイン、建築デザイン、都市計画といった専門家と議論しながら、学生が主体と

なって釜川周辺地区の未来を考える「KAMAGAWA DESIGN CLASS」を行った⁵。ここでは、4つのシナリオが提案され、ビジョンブックを作成するための足がかりになっている。今後は、宇都宮市、地域住民、釜川地区関連地域団体、第三セクターと、都市プランナーや環境デザイナー等の専門家を交えた、「釜川周辺地区景観づくり推進協議会（仮）」を組織することで、景観形成重点地区指定後の動きを見据えながら、継続的な議論の場の形成を図るとともに、景観形成重点地区指定を目指す市の動きと平行してビジョンブックを作成していく予定である。

4 釜川をクリエイティブエリアに

以上のように、釜川沿いには、遊びや学びを通した創造的な活動を行うことができる土壤がある。そのような状況の中、より多くのクリエイターが集まり、多様な活動を促すために、釜川をクリエイティブエリアとして確立することを目指している。そこで現在、上層部が廃墟として放置されていた5階建てのビルを、文化の拠点とするプロジェクトを共同主宰しており⁶、少しずつ改修しながら再生させている。

5階は、廃墟の雰囲気を残したイベントスペースやスタジオとして地域に提供し、川に面する階段室を各フロアの雰囲気が滲み出る展示スペースとして使い始めている（写真8）。4階のシェアオフィスには、デスクや、協働スペース、会議室を設え、すでに入居者で埋まりつつある。前面道路上部に階段室からアクセスできる道路占用による工作物のデッキを張り出す計画を進めており、実現すれば、さまざまな活動がまちに表出するファサードになる（図4）。また、デザイナーやアーティストによるワークショップやレク

チャーイベントを行う「カマガワ・クリエイティブ・スクール」を立ち上げて、創造的な活動の担い手を育てていく予定だ。このビルは、近隣のコミュニティだけで完結させず、他の地域とヒト・モノ・コトを介したネットワークを形成して新たな経済圏を確立することを目指しており、これが実現すれば、多様な人々や活動を許容し、促進するプラットフォームとして、釜川の風景を育む器になるだろう。

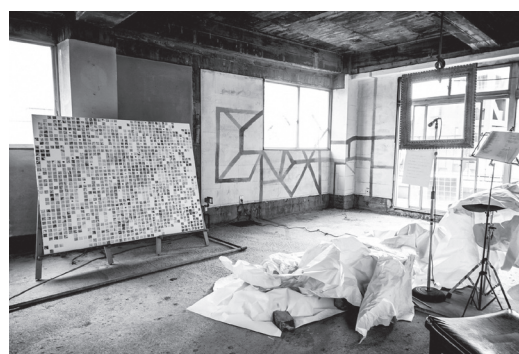


写真8 宇都宮市に縁のあるアーティストによるグループ展
RiO撮影

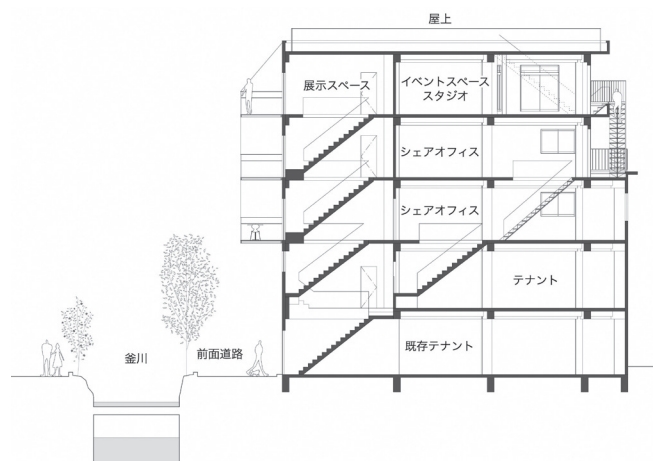


図4 当該ビル断面図

筆者作成

参考文献

- 宇都宮市, 2015, 『第2期宇都宮市中心市街地活性化基本計画』
中村周, 2019, 「余白から遊び場へ」『建築雑誌』2019年3月号, 41
錦二丁目まちづくり連絡協議会 マスタープラン策定委員会
マスタープラン作成企画会議, 2011, 『これからの錦二丁目
長者町まちづくり構想 (2011-2030)』
港まちづくり協議会, 2013, 『みんなとまち VISION BOOK
2013-2018』

⁵ 平成30年2月17日から3月17日の間に開催した。

⁶ 佐藤貴洋, 城生一葉, 中島弘貴らとビルトザリガニを共同主宰。